

9期 知らなかった あんな話 こんな話 科

～そして生きがい再発見～

日時： 令和4年2月10日

場所： 服部緑地

学習テーマ： 自然観察のすすめ

講師： 菅井啓之先生



内容 服部緑地を歩き、動植物を見ながら自然観察の考え方、仕方を学んだ。

最初に先生が自然観察は、対象物をよく観察して「気づき」が大切であり、よく観察して様々な場所に生命の営みがあることに気づくことが肝心であると強調された。

服部緑地の西口から歩き出し、入口にある松と椿、桜の観察から始まった。

松かさに種が入っていてそれがついている羽根とともに風で飛んで行って子孫をふやす。椿の小枝の先の花芽や葉芽の付き方を学んだり、桜の小枝はわずか数センチ成長するのに数年かかることを知った。



カラスが飛んでいるのを見て、カラスは数十の言葉を使ってコミュニケーションをしていると話された。さらに鳥の白い糞が舗装ブロックの上に丸い形で落ちているのは珍しいと写真を撮られていた。

クログネモチの幹の根元がしわだらけになっていたが、これは自重でできたものだった。

円形花壇への道の両側にパンジーや菜の花など春先の花が植えられていた。これら

の花は美しく見せるために、品種改良を重ね不自然な姿だともいえる。

またアジサイの花が枯れたまま残されていたり、ススキの穂が枯れたまま残されていたが、これは逆に自然のままで良いと言われた。



ノウゼンカズラの木が鉄のかごのような柱に、巻き付いている

のを見た。花や葉は全然ついていなく、枝が蔓のように複雑に巻き付いていてところどころ細い多数の根が生えていた。

梅林に着いたが、花はまだほとんど咲いていず、一本の紅梅だけがかなり開いてよい香りを放っていた。ここで梅の花の一重と八重の違いを学んだ。梅の実がなるのは一重だけである。八重の花は雄しべが花びらになっているので実を結ばない。また梅の幹に白っぽい苔のようなものがついているが、これは地衣類でキノコの一種である。また梅の枝に樹液が出ているのがあるが、樹勢が弱っている証拠である。梅林の中に大きな切株があったがこれにもキノコなどが取り付いて切株を分解してぼろぼろになっていた。土に返す自然の営みである。

隣にどんぐりが多数落ちている林があったが、落葉が掃除されていたので乾燥して実が発芽は全然していなかったが、端の草が生えているところは湿っているので発芽して数年たった小さな若木が見られた。

最後に見た樹林では不思議な現象が見られた。古い大きな樹は葉を全部落としていたが、若い低い樹は枯れた葉をつけたままだった。なぜか分かっていない。自然観

察をするとこのように現象の理由を説明できないことは多数あるそうだ。

全体を通じて知らなかったことが多かった。今後は学んだことを生かして自然観察を楽しみたい。



服部緑地西入り口に集合



クロガネモチのしわ



松かさの羽根と種



紅梅